

# 飼育展示していく動物種の分類について

令和6年（2024年）6月17日時点

分類	説明	種数
推進種	<p>【積極的に繁殖に取り組む種】</p> <p>保全、教育及び円山動物園の果たすべき役割の観点から特に必要性が高く、かつ、動物福祉の確保と飼育の継続性の両方について実現が可能と判断される動物種については、今後とも、国内外の動物園・水族館等と連携し積極的に繁殖に取り組みます。特に円山動物園で飼育する意義の強い動物種については、課題の解決を図りながら、積極的に繁殖に取り組みます。</p>	15種
継続種	<p>【状況に応じて繁殖に取り組む種】</p> <p>保全または教育、円山動物園の果たすべき役割の観点から必要性があると判断し、かつ、良好な動物福祉の確保と飼育の継続性の両方について実現が可能と判断される種については、今後とも飼育を継続し、状況に応じて繁殖に取り組みます。</p>	90種
断念種	<p>【やむを得ず飼育を断念する種】</p> <p>良好な動物福祉の確保や飼育の継続性について実現が困難であると判断される種、保全に関する取組と教育、生息環境について伝えられることなど、類似の動物種と比較して効率的な資源（飼育スペース、資金、人員等）配分の視点から優位性が低いと判断される種については、将来的に飼育を断念します。</p> <p>なお、ここに分類した種については、その種の生態、個々の動物の年齢や健康状態、繁殖の可能性等を考慮しながら、動物福祉の充実または飼育個体群の保全等につながることを期待できる他の動物園・水族館への移動を積極的に検討します。したがって、移動により、長期にわたり良好な動物福祉が確保できないと予想される場合など、良好な動物福祉の確保と当該動物種の保全への貢献が両立できない場合は、円山動物園で動物福祉に配慮した飼育展示を継続することとし、当該動物が寿命を全うした後は、当該動物の新規導入を行わないこととします。</p> <p>なお、当該動物種の保全や国内個体群の維持に資すると考えられる場合については、断念種であっても当園への導入を検討することがあります。</p>	26種

## 【飼育展示していく動物種】

※種名に下線がある種は、現在円山動物園では飼育していません。

推進種						
	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
推進種	アジアゾウ	A	A	A	B	陸上最大級の哺乳類だが、密猟や生息環境の悪化・分断により生息数は減少し絶滅の危機に瀕している。円山動物園ではゾウの動物福祉に配慮でき、研究にも取り組める体制を整えていることから、今後繁殖に取り組むとともに、ゾウの保全に寄与できるようゾウの疾病や人工授精、生理学的研究を進めていく。
	アムールトラ	A	A	A	B	ネコ科最大の動物で、生息地の破壊等により野生の個体数が400頭程度（2015-2020年）と推測され、保全の必要性が高い。また、寒冷な地域を主な生息地としていることから、似通った気候の北海道では飼育環境としても適している。海外からの導入のためには国内の繁殖実績が必要となるため、今後の個体群維持のためには継続した繁殖への取組が必要である。
	スンダスローロリス	A	A	A	B	生息地の破壊やペットとしての密猟等で絶滅の危機に瀕しており、保全教育上の重要性が高い。国内個体群は横這いとなっているが、遺伝的多様性の維持のためには飼育下繁殖の推進、個体数の増大が不可欠である。当園は国内で最もスンダスローロリスの繁殖に成功しており、今後も、飼育園としての役割を果たすことが求められている。

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
推進種	ホッキョクグマ	A	A	A	B	円山動物園は日本国内のホッキョクグマ飼育繁殖における中心的な役割を担っており、国内個体群維持における影響が非常に大きい。また、本種は気候変動問題の象徴的な動物であり、本種を通じた環境教育活動の効果は高い。海外との連携及び飼育動物の動物福祉の向上を目的として新施設を整備しており、新規個体の導入は国内外ともに容易ではないものの、飼育下繁殖を積極的に進めていく。
	ボルネオオランウータン	A	A	A	B	森林伐採などの影響で絶滅の危機にあり、アジア各国の連携により動物園における保全活動が行われている。国内12園館で飼育されているが、飼育園で密接に連携して飼育個体群の保全に取り組んでいく必要がある、その中で円山動物園の果たすべき役割は非常に大きい。また、森林伐採の原因となるパーム油の生産は我々の生活にも密接に関わっており、環境教育活動を行うにあたり代えがたい役割を担っている。
	マンドリル	A	A	B	B	生息地の破壊や食肉目的の密猟などで絶滅の危機に瀕しており、保全教育上の重要性が高い。国内個体群は横這いとなっているが、遺伝的多様性の維持のためには飼育下繁殖の推進、個体数の増大が不可欠であり、当園も飼育園としての役割を果たすことが求められている。
	ユキヒョウ	A	A	B	B	生息環境の悪化や密猟により絶滅の危機に瀕している。国内では、9園館で飼育されており、(公社)日本動物園水族館協会(以下JAZA)から積極的な繁殖を求められている。当園では、これまでに複数回のユキヒョウの繁殖に成功しており、飼育園の中で円山動物園の果たす役割は大きい。
	道内産トガリネズミ類	A	A	B	B	国内に広く生息する一方、環境変化に脆弱な種であり、動物園などにおける飼育知見はほとんど蓄積されていない。北海道固有種で絶滅危惧種に指定されている種もあり、種の保全に向けた、生態解明、飼育条件の研究、繁殖生理に関する研究等、動物園の特性、技術を活かした貢献が求められる。
	オオワシ	A	A	C	B	北海道を代表する希少猛禽類の一種である。生息地の破壊や獲物の減少等により生息数が減少し、絶滅の危機に瀕している。当園はJAZAのオオワシ種別計画管理園であり、その保全の取組を行うとともに、国内で当園の果たす役割は大きい。しかし、施設の老朽化により全面的に改修が必要であり、良好な動物福祉の確保のため飼育スペースの拡充が必要となる。
	カンムリシロムク	A	A	A	B	インドネシアのバリ島だけに生息する鳥類であり、生息地の環境破壊等の影響で生息数が激減し、絶滅の危機に瀕している。横浜市繁殖センターが中心となり保全・繁殖に取り組んでいるが、保全及び教育上の重要性が高く、当園でも飼育園としての役割を果たすことが求められている。
	シマフクロウ	A	A	A	B	日本では北海道のみに生息する代表的な猛禽類の一種。生息地の環境破壊等の影響で生息数が激減し、絶滅の危機に瀕していることから、道内の動物園としてその保全の取組を行うとともに、本種の現状について啓発する必要がある種である。リスク分散のため、飼育園も多少増加傾向にあるが、当園の果たす役割は大きい。
	サイイグアナ	A	A	A	C	絶滅危惧種であり、国際的な域外保全の取組が行われている。当園で飼育している個体はドイツの動物園との共同繁殖計画により入手した個体であり、繁殖体制も整っていることから、今後積極的に繁殖を進める必要がある。
	マレーガビアル	A	A	A	B	絶滅危惧種として保全が求められる種であり、日動水のJCP種(JAZA Collection Planにおいて、保全上の必要性、教育的価値、学術的価値、展示効果その他の指標に基づき、継続的に飼育管理することが必要もしくは望ましいと認められる種)にも指定されている。大型種であることから飼育園館が少なく、当園のように複数の飼育場所を有する園館は限られることから、当園が積極的に繁殖を進める必要がある。
ヨウスコウワニ	A	A	A	B	絶滅危惧種として保全が求められる種であり、日動水のJCP種にも指定されている。当園は国内で初めて繁殖に成功し、本種の個体群維持増大のため、積極的に繁殖を進める必要がある。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
推進種	ニホンザリガニ	A	A	A	A	北海道及び東北の一部にのみ生息する日本の固有種であり、開発や外来種による圧迫等の影響により生息域が縮小している。札幌市内にも生息する種であり、水辺生態系の保全についての教育を展開するうえで効果的な題材となる種である。当園ではこれまで本種の飼育下繁殖・育成技術及び将来的な野生復元技術の確立を目指した取組を行うとともに、市民向けのシンポジウム等を開催し、本種の保全、水辺生態系の保全、外来種対策の推進等の教育活動を行っているところであり、引き続きこれらの事業を継続するため、積極的に繁殖の取組・研究を行う。
継続種						
	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	アライグマ	C	A	B	A	特定外来生物 <sup>※</sup> として、人間がペットとして持ち込んだ動物が生態系を破壊するという問題について考えてもらう大きな役割を担う。特定外来生物でもあり野生下での繁殖も確認されていることから、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	エゾオコジョ	B	A		B	かつては道内全域に生息していたが、毛皮目的の乱獲個体数が減少したほか、イタチ、ミンク等に圧迫され、生息域が減少している。北海道レッドデータブックでは絶滅危惧種にカテゴリされており、保全の必要性は高い。これまで道内で安定した飼育管理に成功しておらず、将来に向けた飼育技術・繁殖技術確立のための研究が必要である。
	エゾクロテン	B	A		B	かつては道内全域に生息していたが、毛皮目的の乱獲により個体数が減少したほか、毛皮目的で持ち込まれたホンドテン（キテン）が一部野生化・定着し、交雑も懸念される。繁殖生理の解明など将来に備えた技術確立は必要であり、個体群の確立を目指し必要に応じて繁殖の取組を行う必要がある。
	エゾシカ	B	A	B	B	北海道を代表する野生動物であり、また近年は生息数の増加による人との軋轢が生じている種であり、野生動物管理・資源の有効利用等の観点から教育上の有用性は高い。飼育の持続性も十分に期待できることから、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	エゾタヌキ	B	A	B	B	北海道を代表する野生動物の一種であり、近年はアライグマ等の外来生物に圧迫され、生息状況の悪化が懸念されている。喫緊の域外保全の必要性は低い、北海道に生息する哺乳類の展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	エゾモモンガ	B	A	C	B	国内では円山公園を含む道内全域に生息する道内固有亜種であり、木々の間を滑空する等の特徴を有するなど教育上の価値も高い。必要に応じた累代繁殖による個体確保が必要だが、現在の施設は狭隘で、動物福祉の観点から改善が必要である。
	エゾユキウサギ	B	A	C	B	国内に生息する唯一のユキウサギの仲間であり、北海道の生物多様性と独自性の観点における教育上の重要性が高い。現在は繁殖により飼育数が急増し、飼育施設が狭隘になっていることから、これを解決しつつ、必要に応じた累代繁殖を継続する。
	エゾヒグマ	B	A	B	B	北海道の野生動物であり、道内の動物園として、地元の生物多様性、人と野生動物の関係性のあり方など、来園者に伝えるべきメッセージは多い。展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	エゾリス	B	A	A	B	北海道を代表する野生動物の一種であり、市内の公園にも生息している市民にとってなじみ深い動物である。喫緊の域外保全の必要性は低い、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	オオカンガルー	C	B	B	A	円山動物園の中で唯一の有袋類であり、哺乳類の進化を伝えるうえでも必要な種である。また、オーストラリアでは、駆除方法の議論や肉や皮の利用についてなど、人間と動物との関わり方について考えてもらう教材としての教育的価値が高い。展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	オグロプレーリードック	B	B	B	A	地中に巣穴を掘る生態が特徴的で、展示効果は高いが、喫緊の保全上の必要性は低い。飼育場所をカンガルー館に変更したことにより動物福祉の向上が図られたことから、ペットとして国内に持ち込まれていたこと、原産国では害獣とされていることから、人と動物の関わり方について考えてもらう教材として、教育的価値が高く、飼育を維持していく。
	カイウサギ	C	B		A	家畜として改良された動物で、国内・国外ともに広く飼育されている。動物への接し方や命の教育など情操教育を行ううえで必要な種であるが、ふれあいのためには個体数の増加やスペースの確保が必要となる。ふれあい種として妥当かの検討を行う。
	カバ	B	A	A	B	生息地の破壊や生息地における内乱等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アフリカにおける人と動物の関係を啓発するうえで教育上の重要性が高い。現在飼育中のメス1頭は高齢のため、終生飼育する。その後は、JAZAの国内個体群の維持に協力し、新規個体の導入を検討する。
	キリン	B	A	C	A	生息地の破壊や生息地における内乱等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アフリカのサバンナの現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。しかし、良好な動物福祉の確保及び繁殖の推進のためには、施設の大幅な改善が必要である。今後はJAZAの繁殖計画を踏まえ、必要に応じて繁殖の取組を行う。
	グラントシマウマ	B	B	C	A	アフリカの草食獣の代表的な種であり、特徴的な体色から広く知られており、アフリカのサバンナの現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。しかし、良好な動物福祉の確保は十分とは言えず、同様の役割を担えるエランドとの比較検討を要する。展示個体確保の観点から必要に応じた繁殖の取組を行う。
	コツメカワウソ	B	A	B	A	熱帯雨林や河川の開発により生息数が減少した種であり、また、ペットとして密輸されることもあるため、人と自然環境の関係についての教育に有用である。現在の飼育個体は高齢であるため、良好な動物福祉を確保しながら終生飼育する。その後、新規ペアの導入および繁殖を検討する。
	ゴマフアザラシ	B	A	A	A	道内近海に回遊する種であり、人間の経済活動との軋轢など教育的な役割が大きい点ではゼニガタアザラシと同様であるが、資源の効率的な配分の観点から、ゼニガタアザラシと比較し、海水を接点としたホッキョクグマとの関係性から教育的な役割が高いこと、飼育園館が多く個体流動性が高いことから、本種を継続種として維持することとする。
	シシオザル	B	A	B	B	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アジアの森林の現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。しかし、良好な動物福祉の確保が十分とは言えず、動物福祉の向上のためには同様の役割を担えるクロザルの飼育との比較検討を要する。国内での飼育下繁殖は順調かつ、個体群規模も十分であるため、必要に応じて繁殖の取組を行う。
	シセンレッサーパンダ	B	A	A	A	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アジアの森林の現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。国内個体群は安定しており、JAZAの繁殖計画を踏まえ、必要に応じて繁殖の取組を行う。
	シロテテナガザル	B	A	A	B	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アジアの熱帯雨林の現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。また、その特徴的な生態や運動能力により展示効果も期待される。一方で国内での飼育下繁殖は順調かつ、個体群規模も十分であることから、必要に応じて繁殖の取組を行う。
ダイアナモンキー	B	A	B	C	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アフリカ熱帯林の現状等教育的な重要度も高い。国内個体群は減少傾向にあり、海外からの導入の可能性が低いものの、展示個体として飼育を維持していく。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	チンパンジー	B	A	B	A	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アフリカの熱帯林の現状の啓発や、人類の進化等科学的な教育の題材として重要性が高い。また、その特徴的な生態や運動能力により展示効果も期待される。一方で国内での飼育下繁殖は順調かつ、個体群規模も十分であるが、将来にわたっての遺伝的多様性の確保や、個体群の維持のため、繁殖の取組を行う。
	ニホンザル	C	A	B	A	日本固有種であるが野生の生息数は多く基本的に保護の対象とはされていない。しかし、日本人になじみが深く、また、人との間に多くの関りがあるため、教育的価値が高い。飼育の持続の面では、他園館で飼育されている個体数は多いが、群れに新個体を導入することが難しいため、群れの更新も踏まえた飼育計画を立てる必要がある。
	ドグエラヒヒ	C	B	B	A	アフリカ原産のサル類であり、当園で飼育するサル類のうち、唯一の草原性のサルである。国内個体群は安定しており、喫緊の繁殖の必要性はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	ハダカデバネズミ	C	A	A	A	真社会性をもつ哺乳類として非常に特徴的な動物。アフリカの生物多様性を説明するために有効である。一定数での群れ飼育が可能な種であることから、持続的な展示を目的とした飼育・繁殖を行う。
	ヒツジ	C	B	B	A	家畜種であり、種の保全としての意義は低いが、性格も温厚であり、ふれあうこともできるため、動物への接し方や命の教育など情操教育を行ううえで必要な種である。展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	フサオマキザル	C	B	B	A	南米原産のサル類の一種で、大型類人猿を除き、唯一野生個体での道具の使用が確認されているほか、介助用動物として使役されることもあるなど、霊長類の知能や進化の観点で教育上の有用性が高い。国内個体群は比較的安定しており、喫緊の繁殖の必要性はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	ブラッサグエノン	C	B	B	B	アフリカ原産のサル類であり、ダイアナモンキーと同じく、森林の樹上高所に生息するサル類である。国内個体群は安定しており、喫緊の繁殖の必要性はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	マレーグマ	B	A	B	B	クマの中では最も小さな種で、特徴的な鉤爪を有する。現地では生息地の消滅、農作物被害の害獣として駆除、食肉を目的とした密猟など、人と動物の関わり方について考えてもらう教材として教育的価値が高い。ただし、国内の飼育個体数は少なく、国内個体群の維持は難しい状況である。現在、当園で飼育個体はいないが、新規個体の導入を目指すとともに余剰個体の受け入れ先としての機能を果たすことも検討する。
	マレーバク	B	A		B	アジアの熱帯雨林を代表する種のひとつと言える。ただし、国内での今後の飼育個体数維持は難しい状況である。現在の獣舎は旧獣舎を参考に面積配分されており、繁殖を行うためには、良好な動物福祉の確保が十分とはいえない。種別管理計画の意向も考慮しながら、余剰個体の受け入れ先としての機能を果たすことも検討する。
	ミーアキャット	C	B	B	A	アフリカの小型肉食獣としてアフリカの生物多様性を伝えるために有用な種である。現状国内個体群は比較的安定していることから、状況に応じた繁殖の取組を行う。
	モルモット	C	A	B	A	家畜として改良された動物で、国内・国外ともに広く飼育されている。ふれあい動物として適当で、また、家畜としての歴史も有することから、教育的価値が高い。家畜種であることから種の保全としての意義は低いが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
ライオン	B	B	B	A	アフリカの食物連鎖の頂点に立つ動物として広く知られており、命の循環を伝えるのに有用な種である。国内では広く飼育されており、積極的に繁殖に関わる意義はそれほど高くない。オスとメスを導入して形態の違いを観察できるよう展示するが、当園で繁殖は行わない。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	リスザル	C	B	B	A	南米原産のサルとして、その形態や生態を説明する動物としての教育的効果は高い。国内個体群は比較的安定していることから、喫緊の繁殖の必要性はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	北海道産コウモリ	B	A	B	B	身近に生息しながら、あまり認知されていない種として、北海道の生物多様性教育の観点で有効な種である。また、飼育管理、繁殖等の研究がほとんど行われておらず、将来的な保全の取組に備えた各種研究が不可欠である。なお必要な飼育スペースは比較的小さいことから、累代繁殖による個体群の形成も可能である。
	北海道産ネズミ類	B	A	B	A	身近に生息しながら認知されにくい種として、北海道の生物多様性教育の観点で有効な種である。累代繁殖による個体群の形成にあたっては若干の施設拡充が必要である。
	アオサギ	C	A	B	A	北海道の湖沼に生息する群居性 <sup>※</sup> の水鳥であり、群れでの展示や観覧間近での営巣の展示等が可能である。北海道の湖沼生態系を解説するうえで有用な種。他種との同居、一定数での群居が可能な種であり、動物福祉に関する問題点も解決しやすい。
	エゾフクロウ	B	A	B	B	北海道に生息する代表的な猛禽類の一種であり、繁殖生理の解明など将来に備えた技術確立が必要である。現状の動物福祉に関する問題も少なく、飼育の持続性も良好であることから、飼育を継続し、飼育スペースの状況を見ながら必要に応じて繁殖の取組を行う。
	エゾライチョウ	B	A		B	札幌市内の山林も含めた道内全般に生息する。十分な調査が行われていないが、生息地の開発や狩猟等による圧迫により生息域の縮小が懸念される。身近な野山の鳥類であるが道内園館での飼育は行われておらず、北海道の生物多様性教育の題材として有効であり、持続的な展示及び繁殖技術の確立を目的とした飼育・維持を行う。
	オオタカ	B	A	B	B	道内生息種として繁殖生理の解明など将来に備えた技術確立が必要である。現状の動物福祉に関する問題も少なく、飼育の持続性も良好であることから、飼育を継続し、飼育スペースの状況を見ながら必要に応じて繁殖の取組を行う。
	オシドリ	B	A		A	道内にも生息する水鳥の一つである。他種との混合展示を念頭に、北海道の湖沼生態系の多様性を示すうえで有用な種である。展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	オジロワシ	B	A	C	B	生息地の破壊等により減少傾向にあり保全が必要な北海道を代表する猛禽類の一種であり、鉛中毒や風力発電施設への衝突事故等、人の経済活動等による野生動物の圧迫に関する教育の題材として重要性が高いが、十分な飼育スペースの確保にあたり推進種であるオオワシと比較検討し、必要に応じて繁殖の取組を行う。
	ゴイサギ	C	A	B	A	北海道の湖沼に生息する群居性の水鳥であり、群れでの展示や観覧間近での営巣の展示等が可能である。北海道の湖沼生態系を解説するうえで有用な種。他種との同居、一定数での群居が可能な種であり、動物福祉に関する問題点も解決しやすい。
	ショウジョウトキ	C	B	B	A	南米原産の水辺の鳥類の一種で、群居性が強く他の鳥類の混合展示により、南米の生態系を表現するうえで有用な種。来園者の間近での営巣行動なども期待できることから展示効果も高い。国内個体群は安定しており、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	シロフクロウ	B	B	B	B	北海道でも稀に見られる鳥であるが、喫緊の保全上の必要性は低い。特徴的な外観や北極圏・北方圏の生態系を解説するうえで有用性が高い。国内個体群は安定しており、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	タンチョウ	B	A	B	A	日本では北海道東部を中心に生息する、北海道を代表する鳥類であり、湿原の生物多様性を紹介するうえで欠かせない種である。なお、絶滅危惧種に指定されているものの近年は生息数が増加傾向にあるなど、喫緊に生息域外における保全を必要とする状況ではないが、道内の動物園としてリスク分散のための飼育等への協力を行う必要がある。
	ダチョウ	C	B	B	A	世界最大の鳥類で、飛ばない鳥としても知られており、代替種は少なく、生態学的な教育的価値は高い。展示個体確保の観点から必要に応じた導入・繁殖を計画する。
	チリーフラミンゴ	B	B	B	A	水辺の鳥類として広く知られている種であり、特殊な形態や採食方法、さらに繁殖の様子が来園者からも観察しやすいなど、展示効果が高い。本種は長寿であり、繁殖についても一定規模以上の群れであれば安定して行われることから、国内個体群は安定しており、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	トビ	C	A	B	B	道内生息種として繁殖生理の解明など将来に備えた技術確立が必要である。また、現状の動物福祉に関する問題も少なく、飼育の持続性も良好であることから、飼育を継続し、飼育スペースの状況を見ながら必要に応じて繁殖の取組を行う。
	ニワトリ	C	B	B	A	品種改良を加えられた家禽種であり人の食物として利用されていることもあり、命や人と動物との関わりについて伝える動物として教育的価値が高い。入手も容易であることから、当園では必要に応じて導入・繁殖の取組を行う。
	ノスリ	C	A		B	国内普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低い、動物福祉に関する問題も少ないため、展示個体確保の観点から継続して飼育を行う。
	ハイタカ	B	A	B	B	国内普通種であり、保全の必要性は現状では高くないが、将来に備えた飼育・繁殖技術の確立が必要である。現状の動物福祉上の問題も少ないため、展示個体確保の観点から飼育を行い、飼育スペースの状況を見ながら必要に応じて繁殖の取組を行う。
	フンボルトペンギン	B	A	C	A	産卵地（グアノ層）の燃料採取を目的とした破壊や漁業における混獲、採餌対象魚の競合などにより、生息環境の悪化が指摘されている。円山動物園唯一のペンギン目の鳥であり、高い教育効果も期待できる。一方で飼育施設の老朽化及び狭隘により、今後益々求められる動物福祉水準を確保するためには施設の大幅な改善が必要である。国内においては飼育下繁殖手法が確立され個体群規模も十分であることから、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	ベニイロフラミンゴ	C	B	B	A	水辺の鳥類として広く知られている種であり、特殊な形態や採食方法、さらに繁殖の様子が来園者からも観察しやすいなど、展示効果が高い。本種は長寿であり、繁殖についても一定規模以上の群れであれば安定して行われることから、国内個体群は安定しており、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	モモイロペリカン	B	B	B	A	アフリカからヨーロッパ、アジアに生息しており、特徴的な形態や行動から来園者に興味を持ってもらいやすく、園内での教育に有用な種である。今後、展示スペースの改修およびメスの導入と繁殖を検討する。
	ユーラシアワシミミズク	B	A	B	B	北海道において迷鳥または一部地域においては繁殖も確認されているが、生息数はごく少数である。性質が安定しており北海道の生物多様性の普及啓発においても有用な種であることから、国内個体群の状況を踏まえ、必要に応じて繁殖の取組を行う。
	外国産小型鳥類	C	B	B	B	多様な鳥類を数多く飼育展示することにより高い教育展示効果が期待できる。熱帯鳥類館の飼育展示方針を鳥類中心とした展示へ変更するに伴い、複数種でも良好な動物福祉を確保しつつ飼育が可能な種を選定し、飼育を継続することとする。
北海道産小型鳥類	B	A	B	B	熱帯鳥類館の飼育展示方針を鳥類中心とした展示へ変更するに伴い、断念種であるアカハナグマ及びクジャクのスペースにて、北海道の生物多様性教育の一環として、継続的に展示を行う。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	アオホソオオトカゲ	A	A	A	B	インドネシアのバタンタ島にのみ生息する固有種であり、近年絶滅が危惧されている。域外保全としてはもちろん分類学的に必要な種であり、当園はJAZA 加盟園で初めて繁殖に成功した園に贈られる繁殖賞を受賞していることもあり、継続的に飼育を行う。
	アカスジヤマガメ	C	B	A	A	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することができる。動物福祉に関する問題も生じにくいため、展示個体の確保の観点から継続して飼育を行う。
	アメリカドクトカゲ	B	B	A	B	IUCN のレッドリストでは準絶滅危惧種に分類されており、飼育下繁殖技術の研究も途上の種である。当園は平成 29 年 (2017 年) に本種の繁殖に成功しており、引き続き繁殖のデータを蓄積し、技術確立を進めるべき種である。
	アルダブラゾウガメ	B	A	C	B	絶滅危惧種であるが、国内個体群は安定していることから、当園が喫緊に繁殖に取り組む必要性は低い。外観からも展示効果は高く、ゾウガメ類全般の保全に関する教育的な題材としても有用であることから継続した飼育が必要である。将来的には展示個体の持続的確保のため、繁殖も視野に入れるが、繁殖に供することが出来るオス個体の入手は困難を極めることから、引き続き情報収集を進める。
	アルマジロトカゲ	B	A	A	B	南アフリカに生息する希少なトカゲ、形態が特徴的であるためペットとしての販売を目的とした密輸の対象となっている。日本がペット目的の生物の輸入が極めて多く、密輸事例も多い現状を広く知ってもらううえで非常に有用な種である。絶滅の緊急度は低いものの、展示個体群を確保するうえで、状況に応じた繁殖の取組が必要である。
	エボシカメレオン	C	B		A	爬虫類の中でも特に認知度が高い分類群であり、その採食方法なども含めた展示効果は高い。爬虫類の進化の多様性を示すうえで有用な題材であることから、新たな個体の導入を目指す。
	オオアナコンダ	C	B	C	B	世界最大級のヘビで展示効果は高いが、現在の飼育展示施設は狭隘であり、施設の改善が必要となる。国内個体群は少ないが保全上の必要性は低く、多様な展示を維持するうえで飼育を継続する。
	クモノスガメ	A	A	A	B	絶滅危惧種であり、国内飼育個体の多くは密輸摘発個体である。域外保全としてはもちろん爬虫類の密輸問題についての教育を行っていくうえでも重要な種であり、継続的に飼育を行う。
	その他小中型ヘビ類	C	B	A	B	動物福祉に関する問題を生じにくいため、展示個体の確保の観点から複数種を継続的に飼育する。
	コウヒロナガクビガメ	B	B	A	B	ヘビクビガメ科の最大種であり、形態も特徴的で、爬虫類の多様な進化等、生物学的教育に有用な種。オーストラリア原産で、国内では当園でのみ飼育展示されている。国際的にも繁殖技術が確立されていないため、状況に応じて繁殖に取り組むべき種である。
	チュウゴクワニトカゲ	B	A	A	B	中国原産の絶滅が危惧されるトカゲで、ペット目的での日本への密輸が絶えない種である。国内飼育個体数は一定程度あるため、状況を見ながら飼育下繁殖を進める。
	ツギオミカドヤモリ	C	B	A	A	ニューカレドニア固有種であり、またヤモリの仲間では最大種である。その外観などから高い展示効果が期待される。国内では当園でのみで飼育されており、継続的に飼育を行う。
	トゲチャクワラ	B	B	A	B	IUCN のレッドリストでは危機種に分類されているが、飼育下繁殖技術は確立されている。商業流通も見られるが、国内園館で飼育展示を行っているのは当園のみであり、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
トッケイヤモリ	C	B	A	A	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することが出来る。動物福祉に関する問題も生じにくいため、展示個体確保の観点から継続して飼育を行う。	



	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	ヒョウモントカゲモドキ	C	B	A	A	トカゲ類の中でも最もポピュラーな飼育種の一つであり、保全上の必要性は低い、動物福祉に関する問題も生じづらく管理も容易である。展示個体の確保の観点から継続して飼育を行う。
	ビルマニシキヘビ	B	A	C	A	大型で展示効果は高いが、現在の飼育展示施設は狭隘であり、施設の改善が必要となる。絶滅危惧種であるが飼育下繁殖も行われており、当園が積極的に繁殖に取り組む必要性は低い。多様な展示を維持するうえで飼育を継続する。
	ハウシャガメ	B	A	A	A	マダガスカルに生息する絶滅危惧種であり、ペット目的での密輸の対象種でもある。環境破壊により様々な生物が絶滅の危機に瀕するマダガスカルの現状を伝えるうえで有用であるとともに、爬虫類の密輸が絶えない現状を広く知ってもらううえでも極めて有用な種である。現状国内個体群は比較的安定していることから、状況に応じた繁殖の取組が必要である。
	ボールニシキヘビ	C	A	A	A	保全上の必要性は低い、ヘビ類の中でも性質が温厚でサイズの的にも扱いやすいことから、実物教育に使用することができ、極めて有用性が高い。動物福祉に関する問題も生じにくい、継続的に飼育すべき種である。
	マダラスナボア	C	B	A	B	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークである。動物福祉に関する問題も生じにくい、展示個体確保の観点から確保すべき種である。
	マツカサトカゲ	C	B	A	B	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することが出来る。動物福祉に関する問題も生じにくい、展示個体確保の観点から継続して飼育を行う。
	ミドリニシキヘビ	C	B	A	A	当園で飼育するヘビのうち唯一の完全樹上性のヘビ類。その生態や外観など高い展示効果が期待され、動物福祉に関する問題も生じにくい、継続的に飼育を行う。
	ミナミインドハコスッポン	C	A	B	B	当園で飼育する唯一のスッポンの仲間であり、生物学的な教育上有用な種である。また、密輸保護個体でもあることから、密輸に関する教育の面からみても展示する価値は高い。保全上の緊急性は低い、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖の取組を行う。
	ミヤコカナヘビ	A	A		A	日本固有種であり、土地開発、農薬による影響、人為的に移入されたインドクジャクやニホンイタチによる捕食などにより生息数は激減しており、絶滅の危機に瀕している。当園でも国内希少野生動物種として JAZA 及び環境省の連携事業として保護保全事業及び繁殖研究を行ってきたが、JAZA の方針として現地での野生復帰に向け個体を他施設に集めて繁殖に取り組むことになったため、当園個体は他施設に移動させる予定である。当園ではミヤコカナヘビ保全に関する普及活動を継続するとともに、将来的な展示に向けて準備を行う。
	熱帯アジア産カメ類	A	A	A	B	熱帯アジア産のカメ類はそのほとんどが絶滅の危機にあり、国際的な生息域外保全が行われている。当園は熱帯アジア産カメ類について、複数の繁殖実績を有しており、今後他施設と協力して飼育・繁殖に取り組む。
	北海道産両生類爬虫類	B	A	A	A	身近に生息しながら認知されにくい種として、北海道の生物多様性教育の観点で有効な種である。必要な飼育スペースは比較的小さいことから、累代繁殖による個体群の形成も可能である。
	オビタイガーサラマンダー	C	B	A	A	陸生の有尾類としては最大種で、両生類の進化と多様性の題材として有用であることから、継続的な飼育展示をすべき種である。安定して飼育することが可能であり、多様な展示を維持するうえで有用な種である。
	コケガエル	C	B	A	B	苔に擬態 <sup>※</sup> する特異な外観など、爬虫類・両生類館における動物を探す楽しさを提供するうえで有用な種であり、継続した飼育を行う。
	マダガスカルキンイロガエル	B	A	A	B	マダガスカルに生息する絶滅危惧種であり、マダガスカルの現状を伝えるうえで有用である。国内個体群は一定数おり、繁殖についても安定していることから、当園は展示個体確保を目的とした必要に応じた繁殖を進める。
ミツヅノコノハガエル	C	B		A	木の葉に擬態する特異な外観など、爬虫類・両生類館における動物を探す楽しさを提供するうえで有用な種であり、継続した飼育を行う。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	ミツユビアンヒューマ	C	B	A	A	両生類として特異な形態を持ち、両生類の進化と多様性の題材として有用であることから、継続的な飼育展示をすべき種である。国内の飼育個体群は小さいが、商業流通も見られることから持続的な入手は可能である。
	ヤドクガエル類	B	A	A	A	本種は有毒カエルとして広く認知されており、美しい外観と併せて展示効果は高い。カエル類は環境変化の影響を受けやすくその多くが絶滅危惧種であるなど、カエルの展示を通じた環境教育も可能である。当園ではこれまで多種において繁殖実績を有することから、他園館における飼育展示の基礎となっている。今後もこの繁殖技術を生かし、必要に応じた繁殖の取組を行う。
	ボルネオ産は虫類・淡水魚類・昆虫類	C	B		A	ボルネオ島の環境、生態系を疑似体験し、生物多様性や保全の必要性を、施設の観覧と解説をとおして効果的に学習してもらうため、島の熱帯雨林に生息する代表的で特徴的な種であり、入手しやすい種を飼育展示する。
断念種						
	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
断念種	アカハナグマ	C	B	B	B	当園で飼育する南米原産動物のうち、唯一の食肉目であり、南米生態系を構成する要素として教育的な価値は高い。しかし、熱帯鳥類館での飼育展示方針を、南米を中心とした地理学展示から鳥類を中心とした展示へと変更するため、現在飼育している個体を終生飼育した後は、この種の飼育を断念する。
	アメリカビーバー	C	A	C	B	木を伐りダムをつくるなど生態が特徴的で、毛皮の利用のために乱獲された歴史があるなど教育的効果も高いが、現在飼育中の個体は国内最高齢の老齢個体であり、こども動物園は今後、家畜種を中心とした動物を飼育することを見込んでいることから、当該個体を終生飼育し、その後この種の飼育を断念する。
	エランド	B	B	C	A	アフリカの草食獣であるが喫緊の保全上の必要性は低い。サバンナの現状を啓発するうえで教育上の重要性はあるが、同様の役割を担えるシマウマの飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	クロザル	B	B	C	C	国内での飼育個体数は少なく、遺伝的多様性を保つのが極めて困難な状態となっている。一方、同じく熱帯雨林館で飼育中のシシオザルは、国内飼育個体数がクロザルの5倍程おり、遺伝子の多様性を保持できる可能性が残されている。クロザルの飼育の持続性が困難なこと並びに熱帯雨林館のサル類の良好な動物福祉の確保のためシシオザルの飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	サーバルキャット	C	B	B	B	アフリカの小型肉食獣であるが喫緊の保全上の必要性は低い。また、国内での飼育個体数は少なく、国内個体群の維持が困難である。他種の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	シンリンオオカミ	C	A	C	B	シンリンオオカミはその生態上、群れ内の雄雌それぞれの順位争いが激しく、当園の現施設においてつがいを形成させ、継代的に雄・雌を含む群れで飼育し、繁殖を進めていくのは困難であると判断し、この種を断念種とする。 令和4年(2022年)に当園帰属となる雌個体2頭が他園で生まれ、雌2頭での飼育であれば、激しい争いを避けて良好な動物福祉を確保しながらの飼育が可能と判断し飼育を再開したが、種に対する分類の判断は断念種のままとする。
	ゼニガタアザラシ	B	A	B	B	飼育下個体群の遺伝的多様性の維持や個体群動態的な健全性の維持にあたっては現集団の規模はもちろんのこと、計画的な繁殖推進のための個体移動の流動性が重要となるが、飼育園館が多く個体の流動性が高いゴマファザラシに比べ、ゼニガタアザラシは飼育園館が少なく、また、環境省で実施している有害獣捕獲事業で捕獲された野生個体が飼育キャパシティを圧迫していることから、個体流動性が低下している。この状況から、ゴマファザラシの飼育と比較検討し、ゴマファザラシを維持種とし、ゼニガタアザラシについては断念種とする。

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
断 念 種	テナガザル	C	B	B	C	現在飼育中の個体は種間雑種 <sup>※</sup> であることが判明しており、種の保存の観点からはこの個体の血統を繁殖させていくことはできない。当該の個体を終生飼育した後は、この種の飼育を断念する。
	ヒマラヤグマ	B	B	B	C	日本に生息しているニホンツキノログマはヒマラヤグマの亜種であり、亜種についての説明がしやすい動物ではあるが、国内での飼育個体数が少なく、国内個体群の持続が困難である。現在飼育している個体は老齢のメス1頭であり、繁殖に供することはできないため、現在飼育している個体を終生飼育した後は、この種の飼育を断念する。
	ブチハイエナ	B	B	C	B	<p>アフリカの草原に生息する中型の肉食獣。アフリカの生態系を伝えるために、ライオンのほかに、独特の容姿を持つこの肉食獣を展示する意義は大きい。単独やペアで生活する場合も、メスをリーダーとしたメス優位の群れ「クラン」を形成する場合もある。複数頭を飼育し激しい闘争が生じた際、適切に分離して飼育するためには部屋数やスペースを要する。当園の獣舎で良好な動物福祉を確保しながら複数頭を飼育、さらに繁殖するのは困難で、獣舎の大規模な改修も実質的に困難である。</p> <p>国内では第1次実施計画策定時よりも飼育園館および飼育頭数は増えており、国内個体群の維持に寄与するため、当園は群れ入りできずにやむを得ず余剰となっている個体の受入れ先としての機能を果たすことはできる。また、現在飼育中の個体に他園館からの要望があつて搬出した場合や、死亡した場合に、余剰個体を受け入れることは可能である。</p> <p>しかし、繁殖に取り組むのは困難なため、分類は断念種のままとする。</p>
	ポニー	C	B	B	A	海外産の家畜種であり、こども動物園での中型家畜種として飼育している。ふれあいもできる中型家畜種に関し、北海道の動物園での飼育意義を鑑みると、どさんこ馬等の方がより教育的効果が高いと考えられ、将来的に他種馬へ切り替えることを想定し、この種の飼育を断念する。
	ワオキツネザル	B	A	B	A	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、マダガスカル其自然保護における象徴的な動物の一つであり、教育上の重要性も高い。しかし、国内他園で相当数の個体が維持されており、モンキーハウスのサル類の良好な動物福祉の確保のため、現在飼育している個体を終生飼育もしくは他園へ移動した後は、この種の飼育を断念する。
	アカツシガモ	C	B	B	A	海外普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低い。北海道の湖沼に生息する水鳥の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	アメリカワシミズク	C	B	B	B	海外普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低い。形態や生態が類似種であるユーラシアワシミズクと重なっており、希少種である同種の動物福祉の向上のため、この種の飼育を断念する。
	インドクジャク	C	B	B	A	特異な外観や求愛様式など、展示上の効果は高いが、大型種であるため良好な動物福祉を確保するためには一定の飼育面積を必要とする。北海道産小型鳥類の展示への切り替えのため、この種の飼育を断念する。
	オニオオハシ	C	B	A	B	南米の森林生態系を代表する鳥類の一種で、外見も含めて認知度が高い。熱帯鳥類館の飼育展示方針を鳥類中心とした展示へ変更するに伴い、複数種でも良好な動物福祉を確保しつつ飼育が可能な種を選定する必要があるが、この種は他種への攻撃性が高く、他種の安全を確保することが難しいため、この種の飼育を断念する。
	コールドック	C	B	B	A	品種改良を加えられた家畜種として、人と動物との関わりについて説明ができ、かつ、ふれあいや体験プログラムに供することが可能だが、こども動物園において今後、水禽種の良好な動物福祉を確保した展示を行うことが難しいことから、この種の飼育を断念する。
シナガチョウ	C	B	B	A	中国で家禽化され、番犬替わりに飼育されていたことで知られている。こども動物園において今後、水禽種の良好な動物福祉を確保した展示を行うことが難しいことから、この種の飼育を断念する。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
断念種	シュバシコウ	C	B	B	C	海外普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低い。アフリカ原産の鳥類であるが、アフリカゾーンには当該種を飼育するエリアが無く、また、大型種であるため良好な動物福祉を確保するためには一定の飼育面積を必要とするため、他の鳥類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	ツミ	C	A	B	B	国内普通種であるが、入手は困難で国内飼育個体群の維持が難しい。また、喫緊の保全上の必要性は低い。他の猛禽類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	モモイロインコ	C	B	B	B	ワシントン条約で国際取引は規制されているものの、喫緊の保全上の必要性は低く、ブリーダー等の繁殖個体がペットとして流通している。他の希少鳥類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	アミメニシキヘビ	C	B	C	A	大型で展示効果は高いが、一方で現在の飼育展示施設は手狭であり、今後動物福祉に関する問題を生じる可能性がある。保全上の必要性は低く、また商業的に流通もしており、当園が積極的に繁殖に取り組む必要性は低く、現個体死亡後はこの種の飼育を断念する。
	インドホシガメ	B	A	B	A	絶滅危惧種であるものの、国内ではすでに繁殖技術も確立されており多数が飼育されていることから、当園がこれから取り組む必要性は低い。現在のところ教育面においては、密輸などの問題を抱えるなど教育上の有用性は高いことから、現個体の飼育は継続するが、現個体死亡後はこの種の飼育を断念する。
	オマキトカゲ	C	B	B	C	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することが出来るが、入手が困難であり国内個体群の維持が困難である。現個体死亡後はこの種の飼育を断念する。
	ミズオオトカゲ	C	B	C	A	大型で非常に活動的であるため展示効果は高いが、飼育施設は狭隘で良好な動物福祉を確保するのは困難である。現個体死亡後はこの種の飼育を断念する。
	コイチョウイボイモリ	C	B	A	B	当園で唯一のイモリであり分類学的に必要な種である。今後は JAZA により域外保全が実施されている日本産のイボイモリに変更することも想定されるが、当面の間は本種を飼育展示する、現個体死亡後はこの種の飼育を断念する。